

M.H 自動車メーカー勤務

大分大学大学院

工学研究科卒

大学院修了までの6年間の私の学生生活を言葉で表すなら「必死、出会い、学び」です。学業、生活、趣味、全てに必死に取り組み、様々な学びを得た6年間でした。

まず私が必死になって取り組んだことが学業です。私は幼い頃から自動車が好きで、将来は自動車の開発に携わりたいという夢をずっと抱いていました。その夢を叶えるべく、佐世保西高校に進学し、卒業後は大学で工学科に進学し、日々勉強に励んでいました。自分の好きなことを専門として学ぶことができる喜びを感じながらも、内容の専門性の高さから内容の理解に苦戦することもあり、ただ好きという気持ちだけではやっていけない、夢を実現できないことも実感しました。また、コロナウイルスの蔓延によって、先生方や友人たちと直接のコミュニケーションが取りづらくなったこともさらに追い打ちとなりました。しかし、そういった状況でも、オンライン授業外での面談・質問等を通して可能な限りのコミュニケーション・交流をする事で学びを深めていくことができました。

学業において特に注力したのは研究活動です。自身の研究では、材料力学研究室に所属し、金属材料の水素脆化について研究を行っていました。地球温暖化の影響が問題視される昨今において、化石燃料に代わり、水素が代替エネルギーとして注目を集めています。水素環境下ではステンレス鋼やアルミニウム合金などが多く利用されていますが、こういった材料は他の金属材料に比べ高価であるため、私の研究ではより安価な材料である炭素鋼を水素環境下で安全に取り扱える範囲の解明を目的としていました。自身の研究によって今後の社会の発展の一助となることができるかもしれないという気持ちで取り組みました。研究に取り組む中でどうしても思い通りの結果がでなかったり、実験がうまく行かないことが多々あり、苦しい思いをすることがありました。そんな中でも、先生方や研究室の仲間とのやり取りや、学会での交流等を通して、現象の理解をするための考え方の幅を広げることができ、一定の結論を得るところまで研究をやり遂げることができました。

次に必死に取り組んだことは自立した生活です。私は学部入学から大学院修了までの6年間、両親からの金銭的援助を一切得ることなく学生生活を送りました。理由としては、実家の家計が厳しい状況にあったことと、大人として自立した生活ができるようになりたいとの思いからです。しかし、学生という身分でこのような生活を実現するためには、やはり授業料免除や各種団体による援助など多くの支援を必要とします。この多くの支援を受けるという目的のためにも学業や研究活動には特に注力して取り組み努力してきました。また、不足する生活費を賄う目的と社会勉強という目的のために学業に支障のない範囲でアルバイト活動にも取り組んだことで自立した生活を送ることができました。アルバイト活動に取り組む以前は、どちらかというと人と会話するのが得意な方ではなく、物事を真剣に考えすぎて動けないような人間でした。このアルバ

イト活動を通して、多くの人との交流があり、如何にして人とコミュニケーションをとって物事を進めるか、肩に力を入れすぎずに生きるという考え方といった今後の人生における私自身を形作る重要なことを学ぶことができました。アルバイト活動を通して培った考え方や、人との接し方は研究活動や就職活動、現在の仕事でのコミュニケーションから私生活まで、多くの場面で役に立っています。

必死に取り組んだことの三つ目は趣味です。進学してから最初のうちは、勉強と生活で精いっぱい、生活と心に余裕のない日が続きました。しかし、自立した生活にも慣れてきたころ、「せつかくの学生生活、いろいろなことに挑戦してみたい」との思いからギターやドライブ、旅行、カメラといった様々な趣味に挑戦しました。ただその趣味を楽しむだけでなく、それぞれの趣味を通して自身のコミュニティを広げることができ、様々な人、場所との出会いを楽しむことができました。また、自身の責任の上で様々なことに挑戦するという姿勢は、趣味だけでなく、業務や私生活全てにおいて現在でも自身の軸となっています。

以上のように、私の学生生活は総じて「出会い」に恵まれ、支えられ、目標に必死に取り組むことができた、多くの学びある6年間でした。

現在私は子どものころからの夢を叶え、自動車会社のエンジニアとして働くことができます。そんな私の今後の目標は二つあります。一つ目は自身がたくさんの方の援助によって学生生活を送れたように、今度は自身が支える側となること。二つ目は私が幼い頃に憧れ、夢を抱いたように、子どもたちに憧れられるような自動車を作りたいということです。私が開発に携わった自動車が地元長崎と世界中を走る姿を夢見るとともに、自動車を通じた体験から多くの方々に様々な「出会い」や「愉しさ」を経験していただきたいという思いを胸に、今後も頑張ります。